

# 最優秀賞作品

法学部法律学科 1 年

佐々木 望恵(ササキ モエ)さん

## コロナ禍の困難とオンライン留学が繋げたスクールロイヤーへの志

コロナ禍において、様々な立場の方々が様々な形で影響を受けたことと思います。私の世代も例外ではなく、高校3年生の受験期には、世間の状況も、最後のクラス編成も、よく分からぬまま、登校も叶わない日々が続きました。センター試験に代わり大学入試共通テストを初めて受験する世代だということもあり、受験に関する情報には右往左往する日々でした。部活動の最後の大会も軒並み中止になり、虚無感のなかで勉強していました。このような状況下で、私達にとっての唯一の救いは、あと数か月も経てば大学に入学できるということでした。当時の私が抱いていた大学のイメージは「自由」。入学する頃にはきっと情勢も落ち着いていて、自由に大学にも通える、サークル活動もできる、友人にも会えるだろうと考えていたのです。

私にとって最も大きな困難は、3年下の妹のことでした。妹は、自粛期間が明けて分散登校が始まって、中学校に行こうとしませんでした。自粛期間以降、不登校ないし登校拒否の小中学生の数は、約19万6千人と過去最多に上るそうです。学校・家庭環境の変化や精神的なストレスが原因だと言われています。全員登校の時期になっても家に籠っているままの妹に対して、余裕のなかった当時の私は過度に心配してしまい、家族揃ってますます不安定になる日々が続きました。負の連鎖の中にあるまま受験を迎え、終ぞ私は第一志望の大学に合格することができませんでした。

中央大学に入学することが決まった時に、第一志望の大学への未練が無かったわけではありません。しかし、私は自分の意思で、浪人はせずに、中央大学に入学したいと思いました。半年以上も家に籠っていた妹は、この春から入学するはずだった普通科の高校を辞め、通信制高校に編入することになっていました。不安を抱えた家族に対して、私は前を向いていることを示したいと思ったのです。

都合の悪いことの責任をコロナに全て持たせるのは、正しくないと考えます。コロナというのはただの引き金で、環境の変化など関係ないのかもしれない。本当はずっと前から予兆があったのかもしれない。それに誰かが気づけていたら…？しかし、コロナが無ければ、と当時何回思ったか、数えきれません。私にとっての困難は、自分と家族の状況について心の平穏が保てなかったことです。精神的な問題が、学修に対する意識の面に大きく影響を与えていました。

対面授業は数回受けられたものの、以降は全てオンラインの授業になりました。実際対面授業に参加して感じたのは、マスクを着けアクリル板越しに行う議論では声が聞き取りづらく、効率が悪くなるということ、いっそ Zoom の方が円滑だったということです。最初は、オンラインなんてつまらないし、味気ないと思っていました。しかし、「希望を持って入学してくれたのに、申し訳ない」。教授のメッセージを見ると、対面授業がしたいとは思わなくなっていました。このような状況下で自分が最も真剣に取り組んでいたのは、英語の授業でした。高校時代は英語学習に特に力を入れており、

Advanced クラスを履修できていました。しかし、Advanced クラスの学生のレベルは想像をはるかに超えて高く、発音・語彙・瞬発力などどの点においても自分の能力が劣っていることはすぐに分かりました。彼らに追いつこうと必死になる間は、色々な問題を頭の端の方へ追いやることができたのです。

春学期はこのように味気なく終わってしまったのですが、秋学期からの英語の授業までに英語の力を伸ばしたいと思い、夏季休暇中に「やる気応援奨学金」の制度を利用して4週間のオンライン留学を行いました。コロナ禍で海外渡航が叶わない今、この選択は間違っていなかったと強く思います。英語圏でない国からの生徒が集まっており、年齢も様々でした。彼らとの会話はどれも新鮮であり、コロナ情勢についての意見交換をする中で自分が感じたことはとても多かったのです。約半年間失っていた活力がだんだんと戻ってきたように感じました。この4週間のオンライン留学は、自分がまた学修に対して前向きになれた、きっかけの一つであったと思います。

オンライン留学の成果から、秋学期の英語の授業には自信をもって挑むことができました。自分でも、春学期と比べて口数が増え積極的に会話していることを実感できていました。英語は通年で履修する教科であり、授業の形態は春学期と変わらないのですが、自分の態度が変わればその授業やクラスメイトに抱く思いは全く変わってきます。秋学期から、クラスメイトに対して様々な質問を英語で行うようになりました。対面授業であれば、授業終わりの時間に雑談などができたのかもしれませんが、オンライン授業では、授業時間が終わって接続が切れてしまえばそれきりで、関わりも途切れてしまいます。ですから、授業時間内でできるだけたくさん会話ができるようにと、前もってトークテーマを作ってから出席することもありました。そして、ある日の会話の中で、とある先輩からスクールロイヤーという言葉を目にしました。私はその話に興味を持ち、その先輩とアドレスを交換することができました。メールのやりとりの中で、法職講座や大学のことなど様々なことを教えて頂きました。

私は中学生の時から法律の学修に憧れがありましたが、大学に入学してからは法曹を目指す特別な努力をしていませんでした。それは、通信制高校に通う妹と対面授業のない私は、朝から両親が帰宅するまでの間、毎日一緒に時間を過ごしていたため、私が妹のことを案ずる時間が多かったということもありますが、炎の塔や法職講座のことを耳にすることはあっても、それらについて話し合えるような、雑談ができるような知人がそれまでいなかったということも大きかったのです。ですから、先輩のメールにはとても救われ、自分の気持ちがまた上を向いてきたのもこの時期でした。

妹が家に籠るようになってから、私は、学生のいじめ・不登校ないし登校拒否児童について、強く問題意識を持つようになっていました。しかし、何から学習したらよいのかは分からず、心理学や、教職課程を履修することなどを、漠然と考えているのみでした。先輩からスクールロイヤーという言葉聞き、メールでお話を伺ったり、自分でもインターネットで調べたりするうちに、将来、自分の中心にしたいことはこれだと確信しました。スクールロイヤーとは、特に学校問題を取り扱う弁護士のことです。2020年から本格的に始動したばかりの制度です。学校では解決しきれない問題について学校から依頼があれば、法的観点からアドバイスを行います。

生徒の問題を解決するためには、法的観点のみならず具体的な心理状況なども考慮する必要があるのではないかということ、妹を見ていて強く思います。学校に通えるということが誰にとっても最善の状況である、ということはなく、学校に行きたくても足が向かないという生徒もいれば、自宅学習が体に合っているという生徒もいます。私は妹と長い時間を共にしていますが、それでも未だ心理状況についてはつかめない部分が多く、それを理解するためには専門的な知識や経験が必要であると考えます。また、例えばいじめ解消という観点から考えれば、学校現場自体についての、またその教員についての深い理解も必要であると考えます。生徒とより長い時間を過ごすのも、いち早く

生徒間の問題に気づき状況を把握できるのも、教員の力なくては不可能です。現時点で、スクールロイヤーになるために教員免許の取得は必要ありません。しかし、自分の体験から、生徒の心理に寄り添って適切な判断のできるスクールロイヤーになるためには、生徒指導に関する知見、ひいては教員免許の取得も必要であると考えているのです。

私がスクールロイヤーになりたいと決意したのは12月のことです。入学後すぐに法職講座を履修し炎の塔で勉強している1年生が多くいる、ということその頃初めて知りました。現在、彼らに追いつきたいという思いで、炎の塔の入室試験に向けて勉強をしています。しかし私の場合、入室試験に合格できたとしても、周囲との学修の差を埋めるためには相当な努力が必要でしょう。また、来年度からの教職課程にも身を置く予定で、その両立という面でも、来年度からとても忙しい日々が始まることを理解しています。しかし、今自分のやるべきことを見つけられたということがとても嬉しいのです。また、そこに全力で向かっていくことを許してくれ、応援をしてくれる両親や、何も知らない私に様々な言葉をかけてくれた先輩への感謝の気持ちがあり、来年度からの忙しさに対しては強く希望を持っています。

この1年間は、高校生の時に思い描いていた、「自由」な大学生活とは程遠いものでした。しかし、この1年間は、まさに点と点を線で「自由に」繋ぐような1年でした。様々な経験はどのような結論になるかは分からない、ということを実感できたのです。オンライン留学に挑戦し、そこで自分に少しずつ自信が付き、様々なことに興味を持つことができるようになり、スクールロイヤーという1つの答えを出すことができたのは、コロナ禍の今だからこそ達成できたことだったのだと思います。また、法職講座のシステムから、先輩達の温かさまで、入学前には知らなかった様々なことを知ることができ、今では中央大学に入学できたことがとても嬉しく、強く誇りを持っています。来年度は、大学で過ごす時間も増えるでしょう。大学に自分の居場所を見つけられるように、そしてその場所で、大学でようやく見つけることができた自分の夢を叶えるために、精一杯の努力をします。

以上